

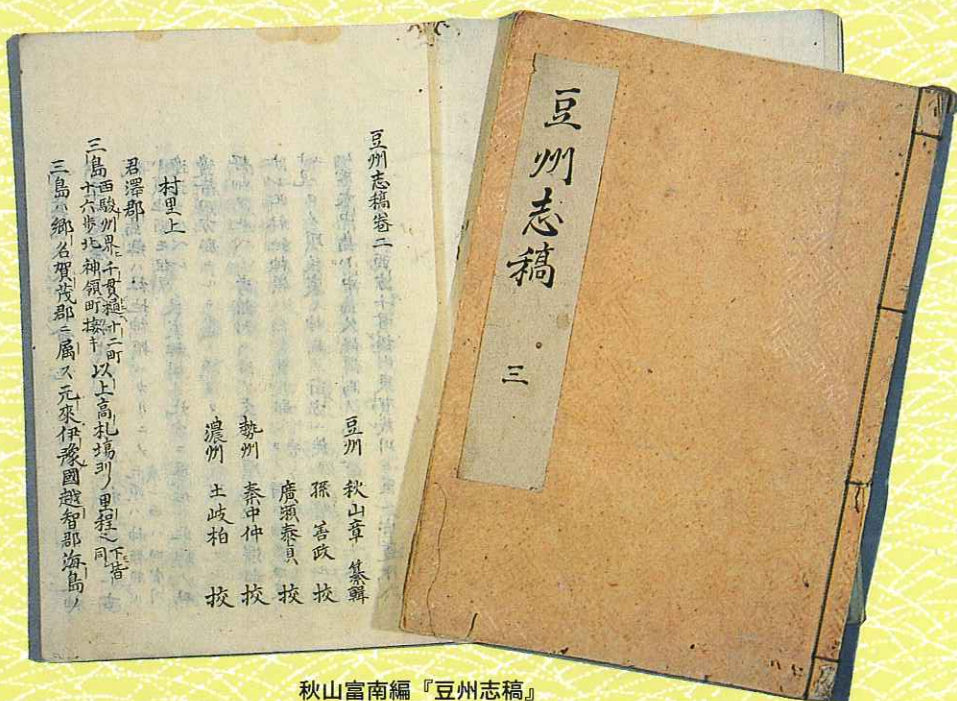
三島市郷土館 企画展

三島の近世の教育

— 並河五一・秋山富南・吉原守拙を中心に —



三条実美公揮毫の「三嶋塾」扁額



秋山富南編『豆州志稿』

三島の教育者の系譜

教育が広く一般庶民にまで及ぶようになったのは明治5年に公布された学制以後のこととされる。では、それ以前の江戸時代には、庶民に対する教育は全く為されていなかったものだろうか。当時は寺子屋や漢学塾といった、いわゆる私塾が多数存立していたのである。それは近代以後の教育とは異なり、義務化されたものでもなく、内容も大きく異なっていた。多数の私塾があって、多くの人々がそこで教育を受けていた。そのような時代背景が基礎となり、明治以後の、三島のような一地方小都市としては極めて珍しく先進的な学校設立と教育を施すことが出来たのである。

菊田寿白(享保15年没・1730)は三島で約100人の門弟を育てたとされる。塾の場所は不明だが、寿白の墓地と碑面の記録が本妙寺に残されている。現在、判っているのもっとも古い三島の教育者である。

並河五一は享保9年(1724)、57歳の時に来島し、三島神社神主の矢田部休翁(盛富)の援助で「仰止館」という漢学塾を開いている。五一の代表的な著作『五畿内志』は三島

で編集されたといわれる。仰止館は富士のよく見える場所にあり「富士見亭」と呼ばれていた。門人には中井孝庵、秋山富南等がいた。

三島宿長谷生まれの福井雪水は、横山玄与に学び、後に江戸に出た。天保9年(1838)、25歳で帰郷し、長谷に「千之塾」を開いている。遠近から多くの門弟が集まったが、彼らは明治期、地方の中心人物となっている。

秋山塾は、『豆州志稿』の編纂者であり五一の門弟といわれる秋山富南が安久に開いた。雪水の師匠の横山玄与は、裏町(現赤橋の通り)で医業のかたわら「横山塾」を開いていた。

三島には、このほかの私塾と、彼らの門弟たちが開いた寺小屋が数力所確認されている。(一覧表を参照)

これら多数の三島の私塾及びその設立者の系譜で、注目すべき点は、その多くが師匠と門人という師弟関係の絆で結ばれていることである。「人物を育てる」という教育の本質が、三島では既に近世という時代に認識され、行われていたのである。



◆ 三島の庶民教育施設 (漢学塾と寺子屋) ◆

塾・寺子屋	開設者	開設年代	その他
河合塾 仰止館	河合春節 並河五一 (誠所)	正徳・享保頃 享保9～宝暦2 (1724) (1752)	社家村の暦師、塾を開設したという。三島宿の北口にあった漢学塾。五一は『五畿内志』を編纂(さん)している。門人(中井孝庵・秋山富南、他)
菊田塾	菊田壽白	～享保15 (1730)	三島宿で約100人の門人を育てた。壽白は漢学・和歌を好み書に優れた。
秋山塾	秋山富南	安永・天明頃	安久の自宅に開設した漢学塾。門人の武田善政・広瀬茶貞・秦仲中・土岐伯等は富南の『豆州志稿』編纂を助けた。
弥佐川塾 横山塾 千之塾	弥佐川東朔 横山玄与 福井雪水	寛政6 (1794)～文化6 文化・文政頃 (1809) 天保9～明治元頃 (1838) (1868)	300人余の教育にあたった。玄与は三島宿裏町の医者、小規模な塾であったが、門人に福井雪水がいる。三島宿長谷街の自宅に開かれた漢学塾。名声を慕い遠方より多くの門人が集まった。門人(田中島雄・大村和吉郎・山口余一・小川宗助・矢田部盛次・島田俊一郎・箕田寿平・宇野朗・三浦丈八郎・渡辺輝寿、他)からは明治期に活躍する人材が育った。
後素義塾	箕田寿平	安政頃～明治6 (1873)	八反畑の自宅で開設。明治6年、小学校設立で閉鎖される。寿平は経学・俳諧・書画に優れていた。
旭家塾	旭昇	～明治6 (1873)	大場中島に開かれた家塾。幼年男女の教育にあたり、100人前後の子弟が広範囲から通学した。小学校設立で閉鎖される。
榊家塾	榊家	江戸末～明治6 (1873)	平田に開かれた家塾。榊家は代々修験職で学問に優れた家塾を継続した。明治初期には、100人以上の子弟が通学したという。
正心舎	三枝敬之	元治元頃～明治7 (1874) (1864)	加屋町善教寺東隣に開設された。敬之はもと山城国藩士。後に三枝家を継ぐ。門弟約500人。小学校設立と共に廃止された。
千之社 肆修舎	福井良輔 間宮徳兵衛	～明治7 (1874) ～明治7 (1874)	三島宿長谷にあった塾。詳細は不明。明治6年に三島学校の分校となり町費の補助を受けていたが三島学校に合併された。
守静塾	渡辺輝壽	明治2～明治6 (1873)	三島宿市ヶ原の自宅に開いた家塾。明治6年小学校が開設されるに当たり、新設の様式に切り替え、三島学校の分校となった後に三島学校に合併された。
斎藤塾	斎藤藤助	明治3～明治5 (1872)	谷田の自宅で開設。渡辺家は修験道の法印家。輝壽は明治8年『伊豆地理往来』を上梓し、教科書を多数著している。守静塾は6年より勤有学校の5番支校『日新校』となる。
開心庵	吉原守拙、他	明治4年5月～ (1871)	藤助は本陣世古六太夫の食客であったが、六太夫が塾を開かせた。評判が高く、後に農兵稽古所(現在の市役所)の空室に移り、盛況であった。開心庵創設に伴い閉鎖された。町の有志が相談して関屋場奥の建物を利用して開いた学校。明治5年学制が公布されるとそのまま小学校に切り替えられた。

並河五一と仰止館

並河五一（誠所）と『五畿内志』



並河五一の墓（泉町本覚寺）

金堀塚（現三島北高校内）にあったものを、大正8年、現在地に移した。眺望を好んだという五一のために高く築かれている。

江戸時代中期に三島で漢学教育にたずさわった並河五一の墓は弟子の孫、ひ孫の代まで大事に守られ続けた。師弟の絆の強さと、師の徳と恩の深さを物語るものであろう。

五一は、寛文8年（1668）山城国に生まれた。字は尚永、号を誠所という。京と江戸で、漢学・神書・復古学・歌道を学んだ。

五一の名を高めたのは、近世地理学の創草者の一人として『五畿内志』を編纂したことである。友人関祖衡と共に各地を訪れ享保～元文年間にかけて河内志、摂津志、大和志、和泉志、山地志を完成させ、地誌の見本となっている。

五一が三島へ来たのは、伊藤仁斎の下で同門であった三島明神の神主矢田部休翁（盛富）の誘いがあったからといわれる。享保11年（1726）5月には、講堂開きをし、漢学を中心に教授している。これが仰止館といわれ、富士がよく見えるため富士見亭とも称された。

この仰止館からは後に伊豆の地誌『豆州志稿』を編纂する秋山富南を始め、北伊豆の名士が育っていった。

五一は元文3年（1663）71才で没し、三島宿北の小丘陵金堀塚（現三島北高校内）に葬られた。眺望が良く生前五一が好んだ場所であった。五一の薫陶を受けた門人達はその子孫に至るまで墓所を保護し、明治まで毎年追善供養を行ったという。

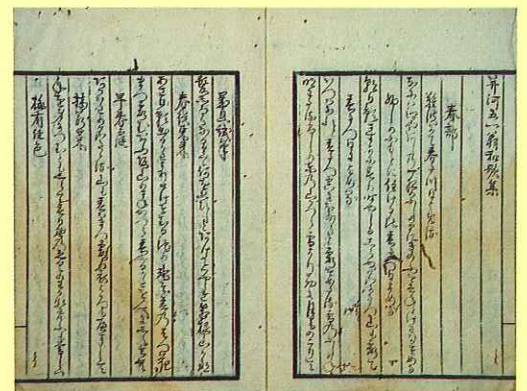
大正4年、生前の功績により従五位を贈られる。大正8年、野戦重砲兵連隊がこの地に移転されるに伴い、墓地は泉町本覚寺境内に移された。同年6月10日三島町の主権により盛大な墓前祭が行われている。

宿場町の三島では、江戸末期～明治にかけて学問を尊ぶ風潮があり優れた教育者が輩出している。その背景として、並河五一の学徳とその門人達の存在を忘れることはできない。



『五畿内志』

関祖衡と編纂を始めたが祖衡は急逝し、五一の力に負う所が多い。一部は三島で編纂したともいわれる。



『並河五一翁和歌集』

従玄孫の並河尚教が編み、武者小路公隆卿が校閲したもの。

秋山富南と「豆州志稿」

秋山富南

60才過ぎから、伊豆の地誌編纂に意欲を燃やした秋山富南の原動力は何であったのだろうか。秋山家は、長く甲斐武田家の家臣であり、武田家滅亡後、現住地の安久へ移ってきた北伊豆の豪農である。

富南は享保8年（1723）誕生した。名を章という。6才で父を、22才で母を失い、祖父と叔父に養育されている。又身体虚弱であったため、仕官や農業への志向はなく、専ら読書と漢詩文に没頭したという。後に邸内で塾を開き子弟の教育にあたり、遠方より多数の門人が集まったという。

富南に影響を与えた人物に、並河五一と白隠禅師があげられる。10代前半、三島の仰止館に於いて、並河五一に学び、強い感化を受けたといわれる。三島でも一部編纂されたといわれる五一の『五畿内志』に流れる学究的精神は富南に受け継がれたといえよう。

また富南を養育した祖父重昌（大光古岸）と叔父術友（一鎚古鑑）は共に白隠禅師と交遊し法縁を結んでいる。禅師が秋山家を訪れるのも度々であった。晩年書数百巻を書写した祖父や、白隠禅師の下に参禅し修行を重ねた叔父と共に、幼少期より度々訪問する白隠禅師の言動が富南に大きな影響を与えたことは想像に難くない。

常々伊豆の地誌が不備であることを残念に思っていた富南が伊豆の地誌編纂を思いついたのは、寛政元年（1789）66才の時といわれ、12年の歳月をかけて伊豆の村々を実地踏査し、編集を重ね、寛政12年（1800）『豆州志稿』として幕府に献上している。

富南は文化5年（1808）85才でその充実した生涯を閉じている。

駿州蘭溪菊圃記
秋陽子嘗稱物多聚於所好吾見蘭溪之於花卉而知之矣若其園圃之規畫亦之繁亭館樓閣欄井燈乃京兆皆川淇園氏記其大而東都海保青陵氏識其細其他支辭備矣而望嶽乎東離外之寬者走為菊圃也專則北而南其觀如名其勝近衛大相國藤公書以所賜也其所在與園空通而如遠矣於是乎當菊圃之南陳列木榻名曰浴聲以為觀賞之所寬政辛亥秋予訊蘭溪引予觀於園紫艷黃英吐芳極妍錦綉光耀煌煌然輝映于一園之中其為品類以百數復之有年旁搜廣索自三都以及四方又大行人由良君讚之園更深見氏越谷野氏輩皆有所輸致焉是故珍異時未奇說殊態嘗有外物勝於其中哉又且每見錦紳先生必請賦菊圃而託諸文此其所為何其清雅也其請也遂不可虛則吾不敢辭而續以狗尾云蘭溪植松氏季英其昌
寛政辛亥歲冬十一月富南秋山章撰東洲左瀾書

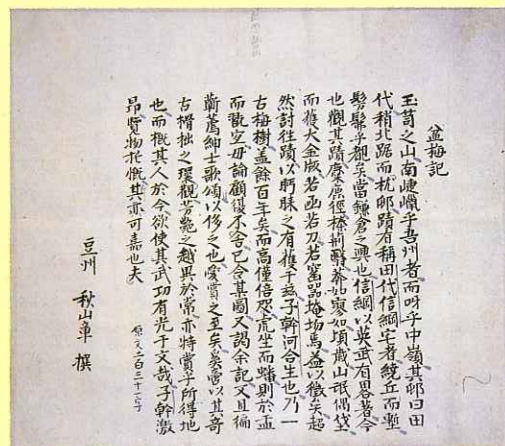
柱聯「駿州蘭溪菊圃記」
撰文は秋山富南。原の名門植松家で使用された柱飾りである。秋山家と植松家は姻戚関係があった



「誦詩讀書」
富南八十歳の書



「崇徳」
富南八十一歳の書



「益梅記」
撰文は秋山富南

「豆州志稿」

江戸時代に編纂された地理書の中でも秋山富南が編纂した『豆州志稿』は、編纂後200年を経た今でも評価の高い書物である。

富南は伊豆の地誌が不備であることを残念に思い、地誌編纂を思いついたのが寛政元年（1789）である。調査は困難をきわめ、葦山代官江川太郎左衛門英毅に後援を願い出たところ、幕府はさっそく許可しこれを奨励した。あらかじめ各村々へ村明細を差出すよう通達を出し、その村明細を基に富南と弟子数人が巡回訪問をして調査するのであった。こうして約12年の歳月をかけ寛政12年（1800）春、完成をみた。

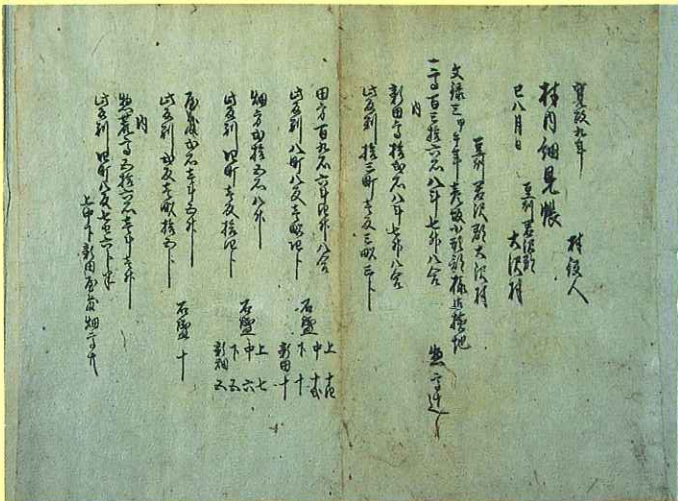
『豆州志稿』は13巻から成り、

1. 建置・沿革・路程他、2. 3. 村・里、4. 山嶽、5. 原野・林・洞窟他、6. 川溪・橋・温泉・海・港他、7. 土産、8. 9. 神祠、10. 11. 仏刹、12. 墳墓・古墳、13. 流寓・人物他としている。

伊豆の地理・歴史が全て備わり、現在でも研究者必携の書となっている。この他に富南は『海島志』『伊豆勝覧』等優れた地誌を著している。

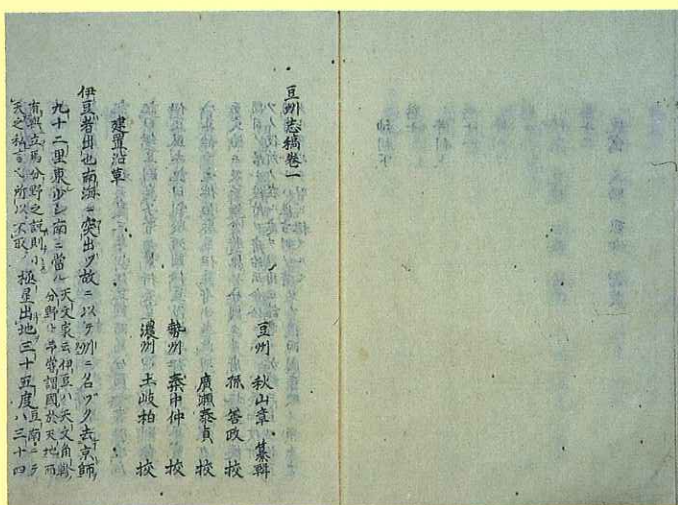
『豆州志稿』は写本により広まったが、明治21年、萩原正平が増補し木版印刷の『増訂豆州志稿』を公にした。しかし出版途中で急逝したため、その子萩原正夫が遺業を継ぎ、明治26年より活版印刷で刊行されている。

尚、同行した門弟のうち武田善政（富南の孫婿）は後に『甲斐国志』の編纂に尽力し、富南の精神を継いでいる。

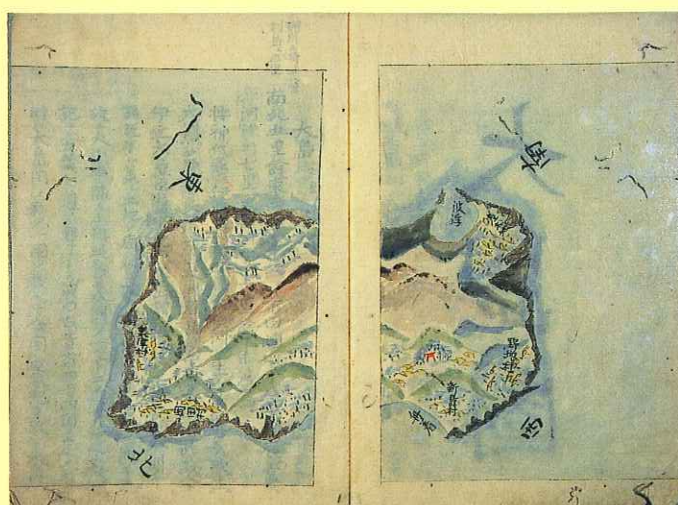


村内細見帳（大沢村）

寛政9年（1798）伊豆の各村々が富南宛に差出した。

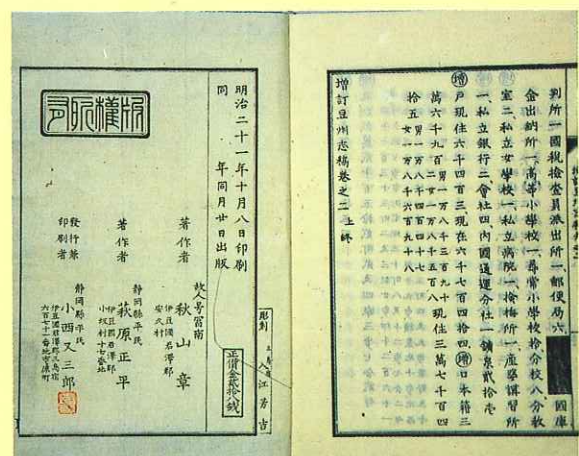


『豆州志稿』(巻一)



『海島志 (稿本)』(大島図)

伊豆七島の地誌書。各島の絵図も描かれている。



『増訂豆州志稿』(奥付)

明治21年萩原正平が増訂し三島榮樹堂より出版したもの。印刷発行者は小西又三郎、彫師は三島宿入江芳吉である。

吉原守拙と「三島覺」



吉原守拙

三島に正式に官立学校が設立されたのは明治12年8月15日のことである。学校名は「三島覺」。近代草創期にあって、三島宿民の教育にかけける情熱は激しく、校名もそうした人々の意気込みを反映したものであった。

当時の三島は、まだ、江戸時代の宿場の名残色濃い田舎町。後に町をあげての大騒動となる東海道線三島駅の誘致論争も問題化されていない時である。しかし、このような三島にも、遙か箱根の向こう側の、首都・東京から聞こえてくる近代化の足音が確実に一步一步近づいてきた時期でもあったのだろう。

この時代において、三島宿民が、近代化の柱として「教育」を据えたことは、驚愕に値する先見性といえるであろう。その内容も単に明治政府の布達に従って学校を開設するというおざなりな対応ではなく、宿民が挙って教育を受けることを目的とし、そこに向かっての支援体制を強力に打ち出したものである。

この特筆すべき明治初期の教育熱の背景には、一人の偉大な人物と、彼を理解し、支えた宿の指導者たちが存在していたのである。

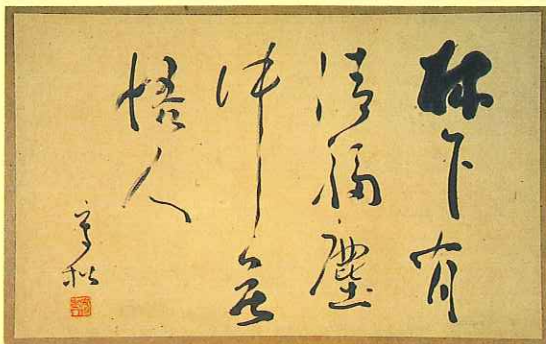
吉原守拙は「三島覺」の初代校長となった人物で、後に、彼の下に育った多くの師弟から「三島の聖人」と讃えられた近代教育黎明期の第一の功労者であろう。

守拙は文政2年(1819)5月10日、大久保長門守の駿豆一万石管理の陣屋役人、斎藤雪斎の長子として駿河に生まれた。幼くして父を亡くし、母親とともに伊豆の古奈(現伊豆長岡町)に移り住む。しかし、若く、志の高かった守拙は同地に留まることを好まず、10代の半ばにして江戸に赴き、刻苦勉強して漢学を修め、また長沼流の兵学を修めている。守拙の秀でた能力は幕臣の吉原雅明に認められ、吉原氏姓を継いで与力となる。しかし、既に時代は將軍慶喜を迎え、幕府は大政を奉還するという江戸最末期を迎えていた。明治になり、守拙は故郷に帰る。教育者・吉原守拙の新たな出発となる。

江戸から下った守拙を諸手をあげて迎えたのは、近代教育を三島発展の柱としようと図る宿の有志たちだった。

明治4年、学制公布前に、「開心庠舎」を開き、吉原守拙と呼我を招いている。学制が公布されると「三島学校」となり、守拙は訓導を拝し、次いで校長となる。

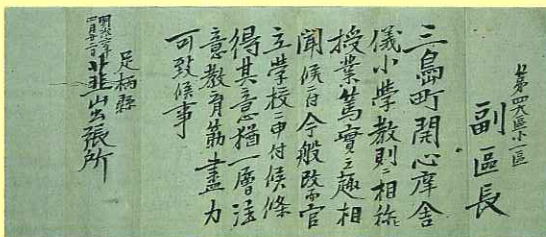
そして、同12年、守拙たちの尽力の結果、旧代官所跡に県下第一といわれた洋風式新校舎「三島覺」が開校したのである。



守拙書「林下有清流塵中在悟人」



明治7年、三島学校訓導任命書



明治6年4月22日付「開心庠舎」を官立学校とする通達書

「三島こう覺」の開校

明治12年8月15日、旧三島代官所跡に開校した「三島覺」は三島宿民が待ちに待っていた近代教育発展の礎となる記念碑だった。

開校に向けての地元有志の尽力話をはじめ、「三島覺」はさまざまなエピソードを生んで後世に語り継がれている。

明治維新間もない明治4年、三島には町民による「開心庠舎」という塾が旧問屋場跡を利用して開いていた。これの校名変更は足柄県の通達により、明治6年に官立学校「三島覺」となった。明治8年、足柄県令の柏木忠俊は「旧代官所跡を学校敷地とするよう」との指示を出し、新校舎建設の動きは前進する。同年10月、宿代表者、河辺喜右衛門・川口周助・三浦丈八郎・佐藤善蔵らが、同地の払い下げを申請し、9年に認可を受ける。見積もられた総工費は34,000円。宿では全額有志の寄付で賄うことを決め、賛同した宿民107名からの寄付が寄せられた。こうして、山口左々右衛門・河邊幸兵衛・栗原宇兵衛らの監督下、明治11年から工事が始められる。開校式はちょうど三嶋大社の夏祭り重なった。また、翌16日には新築成った西洋校舎を使って、前アメリカ大統領のグラント将軍の歓迎式典が開催された。

三島宿民は重なる祝い事に提灯行列をして喜びを分かち合ったと伝えられる。



「三嶋覺」終了証書（明治13年）

吉原呼我と「中権精舎」

吉原呼我（湖南）

養父守拙が三島に近代初等教育の礎を築いたとしたら、三島・伊豆に近代中等教育の種をまいたのは吉原呼我といえるだろう。

呼我は佐倉藩士青木家の二男であったが、学問に長じ請われて幕臣吉原守拙の養子となった。幕府が倒れた後三島に移り、宿の有志の依頼で明治4年5月より父と共に「開心庠舎」を開き読書・算術・習字を教え始める。これは翌5年学制公布と共に「三島学校」に改変され、呼我は父を助け教育の成果を上げた。

しかし、広範な学識を見込まれて、明治8年には、足柄県の師範学校の訓導に任じられ、後には葦山中学校校長となり、有意な少年の教育に携わった。

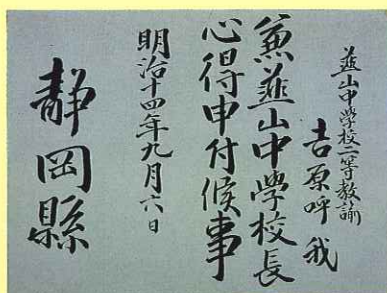
明治16年職を退き、官許を得て14才以上を対象とした漢学専門学校「中権精舎」を創設している（現在の市役所西館の地）。後に英語も教授し生徒数10~40人と多くはないが、精鋭の少年に理想的な教育を受ける希望を持っていた。ここからは賛川他石等、地域の指導者・文化人が輩出している。

呼我は後に静岡師範学校教諭・名古屋幼年学校教授を歴任し、明治33年、惜しまれつつ59才で没した。

また、『日本外史』を点注標記し、明治8年「開心庠舎蔵版」として出版している。出版活動が盛んであった当時の三島の紙価を高らしめた一人である。



吉原呼我



明治14年、葦山中学校長心得申付書



「中権精舎」設置伺書・同教則舎則



吉原呼我点注標記『日本外史』明治8年、開心庠舎蔵版として刊行された。

子弟のきずな（筆子と筆子塚）

江戸時代の庶民教育は寺子屋や家塾がほとんどで、師匠が弟子一人一人の学力に合わせて読み、書き、そろばんから漢文の素読まで数年にわたり施すのが通例である。このため師の門弟

に及ぼす影響は濃く、師弟は人格的に強く結ばれていた。

師に対する尊敬の念も深く、市内に残る筆子塚は、亡き師を慕う筆子連中（門人達）が建てたものである。



「旭昇君之墓表」

（明治24年9月建立、

覚王院塚…東大場北西丘陵）

旭家は代々修験の家柄で、中島左内神社の宮司も勤めている。

大場中島にあった旭家塾は旭昇の家塾であった。明治6年小学校が設立される時に閉鎖されるまでに約300人の子弟が通学した。

この碑は明治8年に亡くなった師を忍び、35人の筆子（教え子）が墓前に建てたものである。



「福井雪水先生之墓」

（日の出町本妙寺）

福井雪水は天保9年（1838）三島宿長谷街の自宅に「千之塾」を開き明治初年まで門弟の教育に尽くした。名声高く、遠方より教を乞う者も多かったといわれる。明治に活躍する人材を多数育てたが、晩年は家庭的に恵まれず、門人箕田寿平の八反畑の寓居に住し、明治3年没した。後に出版された『雪翁遺草』には勤厳な師を慕う漢詩が門弟から多く寄せられている。



「三枝敬之の墓」

（加屋町 林光寺）

三枝敬之は元治元年（1864）加屋町善教寺東隣で「正心舎」という私塾を開いた。非常に繁栄し明治5年小学校設立の後も継続し、同7年三島学校へ合併された。この間の門弟約500人という。

寺子屋から学校へ

明治5年8月3日学制が公布され、三島にも学校が誕生していく。特に三島学校は学制公布と同時に切りかわり伊豆地方で最も早い学校であった。明治6年には三嶋大社境内に勤有学校が創立され、北上・錦田地区の5校を支校とする。同年中郷地区にも中郷学校・大場学校が開校され、8年には松本学校が開校する。

これらの学校は素地があったために早く開校できたと考えられる。三島学校（「三島巒」）は吉原守拙・呼我父子が中心となって開いた開心庵舎が基であり、他に当時優れた塾であった三枝敬之の「正心舎」、間宮徳兵衛の「聿修舎」、福井良輔の「千之舎」を分校としていた。（明治7年12月、三島学校へ合併）

また八反畑の箕田寿平は後素義塾を閉鎖し、中郷学校の校舎として提供している。この時、旭塾（中島）榊家塾（平田）は廃止され、共に中郷学校に吸収されている。

このように、江戸時代に花開いた寺子屋・家塾の教育は明治の近代学校制度へ吸収・移行されていった。



明治初期の卒業証書

出品協力者

- 沼津市
- 植松 節子
- 旭 大四郎
- 奈良 橋義郎
- 修善寺町
- 長倉 慶昌
- 韮山町
- 竹内 芳子
- 三島市
- 秋山 統一
- 伊達 英一
- 赤尾 公子
- 関 守敏
- 樋口傳左衛門
- 東小学校

三島市郷土館企画展 三島の近世の教育

一並河五一・秋山富南・吉原守拙を中心に一

会期 平成8年3月17日～5月12日

発行日 平成8年3月17日

編集 三島市郷土館

〒411 三島市一番町19-3

楽寿園内

TEL 0559(71)8228

FAX 0559(81)3730